

社会科学の方法としての

《理論的デプラスマン》

—「ルイ・アルチュセールを読む」(そのI)—

山 本 哲 士

フランス思想にとどまらず1960年代中頃以降の現在の思想／理論の世界的な変動において、ルイ・アルチュセールによる哲学的な理論行為はたいへん大きな意味をもっている¹⁾。アルチュセールの大枠を規制しているマルクス主義的な問題域はともかくとして、細部における理論上の遂行で新たに展開されている根元的な問題域があり、それが、思考の方法において根本的な影響を以後の論者たちに与えている。そのうちとくに重要と思われるのは、〈切断 coupures〉〈ずれ décalage〉〈種別的 spécifique〉と同じ次元で使用されている〈デプラスマン déplacement〉なる用語である。

アルチュセールやフーコーの邦訳においてこの〈デプラスマン〉は、「位置移動」とか「立場の移動」とかたんに「移動」さらには「移行」などとも訳されて、その前後をめぐる文脈に微妙なずれが生じたり根本的に意味が転倒したりまったく誤って訳されたりする。しかも、それはたんに訳語が適切であるか否か、という技術上の問題でなく、諸々の概念を使用してなされる思考や理論的なものとの基本に関わる問題であって、日本では既存の社会科学的思考において見事に見失われている問題域にあるようだ。

一般的にかかえている課題が二重に折りたたまれて問題を難しくしている。一つは、海外の文化的プラチックと日本の文化的プラチックとが違うことによって、理論的・概念的な思考がトランスされる時に不可避免的に派生する〈ずれ〉がある。もう一つは、既存の日本の社会科学的思考が「実在としての概念」にほとんどとらわれていて、「対象としての概念」との識別を明確にしえず、概念であれば「対象としての概念」になりえいと混同する傾向が多々あることだ。この第二の課題は実に根深い問題で、日本が近代的な学問エピステーメを導入するときア・プリオリなものとのア・ポストリオリなものとの間で処理しきれず²⁾、社会分析を実証的に理論的に蓄積してきたことによる。本稿ではとてもこの大きな根元的課題に真正面から対応していくことはできないが、第一の課題がただ辞書的な語の技術をもって処理されてしまう傾向が強いなかで、第二の課題に少しでも対応していけるような考察の一端を展開していければと思う。そのためには、ともかくもテキストを限定した方がよいと考え、アルチュセールの『プール・マルクス』(1965)³⁾に所収されたヒューマニズムのイデオロギーにたいする考察と唯物弁証法の理論的プラチックにたいする考察において、理論的な手続きがいかに展開されて、社会にたいする理論が産出されていくのか、そのあり方を、ひたすらテキストを読みつづけていくという仕方から示していきたい。

註

- 1) 数多くのアルチュセール論があるが、本稿でとくに参照したのは、Jean-Pierre Cotten, *La pensée de Louis Althusser*, (PRIVAT, 1979), と、Gregory Elliott, *Althusser, The detour of theory*, (Verso, 1987) である。その他の文献については拙書『超領域の思考へ——現代プラチック論』(日本エディタースクール出版部)の文献註「アルチュセール」の頂を参照。
- 2) Michel Foucault, *Les mots et les choses*, (Gallimard, 1966), の第七章, 第九章参照。
- 3) Louis Althusser, *Pour Marx*, (Maspero, 1965) の1973年版を、本稿では使用する。邦訳に『甦えるマルクス I, II』(人文書院)があるが、その訳文や訳語等にしがたっていない。むしろ、論展開の微妙なずれが訳書と違ってみえてくるはずだ。できるかぎり忠実に原書の論理にしたがって読みすすめて、日本語にするうえで生じるずれを処理せずに、〈プラチック〉な域でとどめるようにした。Pour Marx は P.M. と略記する。

1 <デプラスマン>の意味

<デプラスマン>なる用語がもっともわかりやすく論じられている稿が、『プール・マルクス』の巻末に収録された「<現実的ヒューマニズム>にかんする補足的ノート note complémentaire sur l'«humanisme réel»」である¹⁾。この稿の論旨²⁾は、わたしたちには関心のないことで、問題としたいのはその理論的な手続きである。

まず、「現実的 réel」と形容されるヒューマニズムが、「非-現実的 non-réel」なものとは違う「種別的/種差的」であることが示される。観念的、抽象的、思弁的でないという意味論的に定義される「現実的なもの」である。「ヒューマニズム」という準拠 référence をもちつつ、つまり、「ヒューマニズムである」と言及しつつ、古いもの=「抽象的で幻想的 abstrait et illusoire」なヒューマニズムでなく、新しいヒューマニズム、別のヒューマニズムであり、現実的対象を内容とするヒューマニズムであるというものだ。

けれど、この「現実的」と「非-現実的」という種別的差異の指摘では消極的すぎるとしてアルチュセールは、この「古いもの」から「新しいもの」への転移の空間を理論的にうめていく。つまり、現実的ヒューマニズムが目指す内容は、「ヒューマニズム」や「現実的」という概念の「外に hors」ぬけでである。「現実的」という形容詞は、「指示的 indicatif」なものであって、新しいヒューマニズムの内容を探しだすのは、「現実性のなかに dans la réalité」つまり、社会や国家等のなかにおいてであって、探究がヒューマニズムの概念に準拠しているけれども、その抽象的対象を拒否し、現実的対象を求めているゆえにヒューマニズムの概念に対立しているものとなる。

ここで「現実的」という指示的なことばは、古いヒューマニズムが概念的で抽象的なものであると示す「消極的な」働きと、新しいヒューマニズムは古いその外部にあるという「外部の現実性 réalité extérieure」を示す「積極的な」働きの二重の役割をはたしている。しかし、この積極的な働きは、認識のそれだけでなく、「プラチックな指示 indication pratique」であると、その機能の場が示される。

わたしたちはここで「～ではなく～である」と問題がたてられるときに、そこに、種別化された空間が設定され、その空間において指示されているプラチックな領域、およびその空間を指示する概念が実際に（＝プラチックに）機能し働いている場が切りひらかれていることに留意しておく必要がある。これは、実体的な空間ではなく、あくまでもある概念が指示する空間である。アルチュセールはこの「空間」を、フォイエールバツハにかんする第六テーゼにおいて把握してみせる。

抽象的ではない「人間」とは、「社会的諸関係の総体」である、という有名なテーゼがある。

このテーゼについてアルチュセールは、適切な定義としては「なにごとくも意味していない」と判断する。《人間》と《社会的諸関係の総体》という二つのタームのあいだには、疑いもなく一つの関係が存在はしているが、その関係がいかなるものであるかはなんら定義されていない。「それは、定義の関係ではない。認識の関係ではない」不適切なものだという。しかしながら、「この不適切さにはひとつの意味がある。この関係には意味がある。つまりプラチックな意味がある」と、そこに《プラチックな意味》をアルチュセールは見いだす。この不適切という宣言は、「完成されぬばならぬ行為、実行されぬばならぬデプラスマン」を指定 désigne している、と。

この条りはたいへん興味深いので原語をそのまま示しておこう。

Pourtant cette inadéquation a un sens, ce rapport a un sens : un sens *pratique*. Cette inadéquation manifeste désigne une *action à accomplir*, un *déplacement à effecteur*. である。

アルチュセールは、マルクスのテーゼが「不適當である」と宣した。そして、この不適切なところに《プラチックな意味》があるとした。冠詞こそちがえ、“Le sens pratique”なるピエール・ブルデューの書のタイトルを思いうかべるのはわたしだけではあるまい。この書のタイトルの意味を理解するうえでもここは非常に参考になるところなのだ。これを、「実際の意味」としてもよくわからない。「実践的な意味」としたら的是はずれる。「実践感覚」などとしたら完璧に違うものとなる。わたしたちは、アルチュセールの語りそのもののなかに、語られえていないものをアルチュセールの的に探りだしていくことができるはずである。

アルチュセールは、「現実的」なる概念が ‘indique’ するといい、二つのタームの間の不適切が ‘désigne’ するといった。場が示され、二つのタームの間の空間が指定され、そこに《プラチックな意味》さらに《デプラスマン》がある。プラチックな意味とは、完成されぬばならぬ行為であり、それはつまり、実行され効力を発揮する《デプラスマン》そのものである。抽象的人間でなく具体的人間を探究できる。「現実性」に出あってそれを発見するために、「社会へ移る *passer à la société*」³⁾ 必要があるというのだ。

「現実的」という概念は、「プラチックな概念」であるとアルチュセールはいう。この概念はひとつの「シグナル」であり、「道路標識 *panneau indicateur*」と同じである。いかなる動きが実行されるべきか、いかなる方向において、いかなる場が現実の地盤の上に「デプラスマンされる *se déplacer*」べきかを《指す》ものだ。《ここを、現実界！》というのだが、「社会」「社会的諸関係」「これらの現実的可能性の諸条件」へ通じていくこ

とができる。かかる移動は、「場 lieu」のデプラスマンだけでなく、「概念的デプラスマン *déplacement conceptuel*」でもあるとアルチュセールはいう。「場のデプラスマン」とは、抽象的なものから具体的なものへの転移であり、「概念的デプラスマン」とは「土台の諸概念 *concepts de base*」を変えることである。アルチュセールが重視するのは、後者の「概念的デプラスマン」である。

どういふことかという、マルクスは現実を考察する上で理論的諸概念として、「人間」や「ヒューマニズム」という概念をまったく使用せずに、「生産様式」「生産諸力」「上部構造」「イデオロギー」等の、まったく新しい概念を使用したというのだ。この点は、『リール・ル・カピタル *Lire le capital*』において、「実在の対象」でなく「対象としての概念」として論じられていくが、本稿では概念を根元から変える≪デプラスマン≫という点に的を絞って考察をすすめた。

アルチュセールは、現実的—ヒューマニズムなる問題の場で、現実的な対象にたいする科学的分析を試みると、デプラスマンの理論的な意図に存在していた「人間という概念」がもつ「理論的サービス *services théoriques*」が完全に通過されて消滅していかねばならないという。ここに逆説がある——つまり、「われわれにデプラスマンの場を示していたプラチックな概念はデプラスマンそのものにおいて消化されてしまい、われわれに探究の場を示してくれたこの概念はこれからの探究そのものから不在になってしまう」と。この概念はいうまでもなく「現実的」という概念である。

思想の歴史のある瞬間には、≪プラチックな諸概念≫の突然の出現がある。これは「新しい問題設定 *problématique* の降誕」を構成する≪移行一切断 *transitions-coupures*≫の特徴的な現象であるという。プラチックな概念の固有さは、≪内的に不均衡な≫概念の状態にある。つまり、一面では古いイデオロギイ的宇宙にあって≪理論的≫準拠をもっているが他方では、新しい領域^{ドメイン}に関係をもつて到達されるべく実行される≪デプラスマン≫を指す。同時に、前者は≪理論的≫な意味を保つが、後者は≪プラチックな≫信号の意味をもつだけで、方角と場を指すがいまだに適切な概念となっていないのである。ここを、アルチュセールは「境界線 *frontière*」とよぶ。「国境を越え、社会という方角へ進め、現実界が発見されよう」というわけだ。しかし、この標識の場では、イデオロギイを拒否しながら、イデオロギイと対立しているながら、拒否も対立も、イデオロギイの領域にとどまっておき、「具体的なもの」とか「現実的なもの」ということばも、イデオロギイのなかの名辞であるにすぎない。こうした境界線上にとどまるとの称揚こそ、フォイエールバッハの言語であって、マルクスはこの国境を越えたとアルチュセールは指摘した。

さて、わたしたちは、≪プラチックな概念≫と≪デプラスマン≫とが、同時に登場して、概念の移行・切断ないし転換の場に位置づいている点に留意したい。そして、この動きを示す概念の切断において、アルチュセールは道路が線路の踏切を横切って通過していくというような空間的メタファーを使用しているのに気づくことができる⁴⁾。その踏切の信号には、「現実的」という標識が立っている。こちら側は「抽象的」な地で、むこう側は「具体的」なく社会<>国家の地である。こちら側は、哲学的な人間的な土地であるが、むこう側は社会理論、社会科学の土地である。「ヒューマニズム」という準拠に従って、「現実的」という信号、道路標識に導かれて、わたしたちは社会理論の土地へいくべく、境界線を越えて

いくには、理論的に新しい概念を構築せねばならない、その概念が「生産様式」「生産諸力」「上部構造」等といったものである。

わたしたちは、あまりに単純なメタファーにいきさか驚きの念を感じざるをえないが、アルチュセールは確かにそういつているのである。ひとはそこに「問題設定 *problématique*」や「認識論上の切断 *coupe épistémologique*」といったややこしい概念を先にたててアルチュセール哲学を高揚するが、見のがしてならないのは、この踏切=境界線=国境——科学の大陸への冒険——を越えることを、プラチックな営みにおいて考えている点である。それは、実際になされる行為であること、実際に慣習的になされる行為であり、(踏切を渡るときに信号を見、標識を見る etc.)、実際に慣習的に使われていることばをそこで読みとり、そのことばの指示に、慣習的に従って行為しているのである。〈プラチックな概念〉とは慣習的／实际的に使用されている概念であると同時に、実際の行為を客観化する概念でもある。こちら側とむこう側とを橋渡しする概念であり、実際にそうさせてくれる概念である。認識論上では確立されていない概念であり、かといって、まったく暗黙のもとに自覚されていない概念でもない。古い問題設定から新しい問題設定へ、認識論上の切断をなしうる、しかし、認識論以前の概念である。

なぜ、アルチュセールはこうした曖昧な場しかし実際に存在する場を示したのであろうか？ それはたんに、フォイエルバッハとマルクスとの違い、あるいは、フォイエルバッハやヘーゲル左派にとらわれていた若きマルクスとマルクス自身による独自のマルクスとの違いを示すためだけでなく、実際に存在しつづける〈イデオロギー〉の場を示すために、アルチュセールはそうしたのである。社会理論ないし社会科学の理論的世界を明らかにしていく〈理論的デブラスマン〉が、イデオロギーの場でしかなされえないことを示し、イデオロギーとは何であるのかをアルチュセールは見いだそうとした。

概念の転移、境界線を越える行為を示すとき、わたしはいちども〈実践〉という日本語・概念を使用していない。現に、アルチュセール自身も、「実践」に間違いなく対応する‘praxis’なる用語をここではいちども使用せず、‘action’や‘effecteur’‘accomplir’といった語を——つまり^{プラチック}实际的な語——を使っているにすぎない。

「概念の転移」の理論的考察は、『リール・ル・カピタル』において展開され、「イデオロギー」論は『プール・マルクス』における「ヒューマニズム」をめぐる考察で展開されながらその後1970年に「国家論」において再考される。わたしたちは、この二つの理論的営みが、プラチックの場でなされていること、まさに理論的プラチック *pratique théorique* であることを〈実践〉と見誤ってはならないのだ。アルチュセールがどこで〈実践 *praxis*〉なる語を使用しているか、その明確な場が別にある。

〔註〕

- 1) 初出は ‘Note Complémentaire sur l’〈humanisme réel〉’, *La Nouvelle Critique* 164, mars 1965, pp.32-7. (P.M. pp.151-8).
- 2) 社会主義的ヒューマニズムのなかで「現実的」「具体的」にとくりかえしいわれるヒューマニズムが、認識の対象ともなりうるし誤解の対象ともなりうることを示し、科学の理論としてヒューマニズ

ムのこの曖昧さに生じてくるプラチックな問題をとらえかえし社会主義・共産主義の道を示すということ。アルチュセールの論稿は、つねに、マルクス主義としての理論的な規定性を自らに課して論述されるが、その性格を正確につかむアルチュセールの論と、アルチュセールが哲学的思考を社会科学的形式に切りひらいている、ある普遍的な「理論的プラチック」の方法上の提起とを混同せずに理解しないと、アルチュセールはイデオロギー的に生かされたり（例えば、E・バリバルの展開）、始末されたりしてしまふ。本稿は、社会的理論として使用されうるアルチュセールの諸々の概念が提出されるその一歩手前でもって立ちどまり、アルチュセールの哲学的プラチックをとらえていこうとするものである。マルクスの「生産の理論」に、哲学的な理論的プラチックの関係・形式を把握するとき、哲学的な理論形式がヘーゲル弁証法との関わりで理論化されている領域と、歴史的・社会的な理論形式——とくに経済学の概念による構成——が経済学的分析や政治的実践との関わりで理論化される領域との対応／区別が留意される必要があろう。

- 3) 'passer' 'passage' という用語が、《デプラスマン》の域で論じられるが、この意味は第一に、ある生産様式から他の生産様式への生産様式の移行の次元で論じられ、第二に、移行それ自体の局面の分析において、ある特別のタイプのデプラスマンがなされていることを示す。ある転回パターンで構造を維持する相互規定的な関係を定義するのではなく、統合が切り離されることによって互の質と関係が変容される、そういった移行である。史的にはマニュファクチャー段階がそれにあたるが、本稿では理論的な域において、イデオロギーの領域から科学ないし認識の領域へ移ることにおいていかなるデプラスマンが生じるかを論じることにしぼっている。「橋渡し」「通過」「通る」といった訳語でもってとらえ、'transition'の意味に重ねないようにした。Ben Brewsterの英訳 Reading Capital (Verso, 1979)では、'passage'に'transition'をあてているが、バリバルの論稿部分にはあてはまるにせよ、アルチュセールの場合には適切ではあるまい。《transitions-coupures》が現象するところに、'passer'がなされているという「動き」を指す語である。
- 4) 踏切というメタファーをアルチュセールは使用していないが、国境線のところにたつ道路標識という、州境にたつもののように軽くとおりすぎてしまうように感じられるため、ある「危険」を暗示させる意味あいでも踏切としてみた。国境にも検問所がたっている。

2 《理論的デプラスマン》：社会的プラチックと 問題設定

アルチュセールは《デプラスマン》の場とそこで生じる認識論上の切断を示したが、自らアルチュセールの弟子であり彼に多く負ってきたと称するミシェル・フーコーは¹⁾、《デプラスマン》を実際に行使した論者である。本稿は、あくまでアルチュセールの仕事に焦点をおくものであるが、実際に《デプラスマン》を実行することがいかなるものであるかをもう少し明確にするため、フーコー自らが自分の仕事をふりかえって整理した『セクシュアリティの歴史』第Ⅱ巻の序文を探っておきたい²⁾。

アルチュセールの《デプラスマン》に関わる文脈において邦訳『甦えるマルクス』（人文書院 1968年）は、微妙なニュアンスの違いが生じるぐらにとどまりえているが、フーコーの邦訳『性の歴史Ⅱ 快楽の活用』（新潮社 1986年）は、《デプラスマン》に関する箇所では完璧な誤訳となる。それはたんなる語学技術上の問題ではなく、《デプラスマン》という哲学的なしかも社会科学的思想の基本における問題であるゆえ、ある意味で不可避的に発生したことといえよう³⁾。訳者は、《理論的デプラスマン déplacement théorique》に、「理論上の立場の移動」と訳をあてフーコー主体の側の移動ととらえているが、《デプラ

スマン》とは、理論的な「対象にたいする転移」であることを見誤ってはならない。

フーコーは、三つの「理論的デプラスマン」を指摘する。

第一は、「認識の進歩」として指定されてきたことを、「知識を分節化していたディスクールのプラチック *pratiques discursives* の諸形式」としてデプラスマンする。

第二は、「権力の示威行動」として記述されてきたことを、「権力行使を分節化している多様な諸関係、開かれた諸戦略、合理的な諸技術」としてデプラスマンした。

第三に、「《主体》」として指定されていたことを、「諸個人が自らを主体として構成し再認することによって、自己にたいする関係の諸形式や諸様式」としてデプラスマンした。

こうしたデプラスマンによって、第一に、ある者の他の者への関わりにおける真理の働きを研究し、第二に、処罰的プラチックを例にして、権力の諸関係に関する真理の働きを研究し、第三に、自己の自己への関わりにおける真理の働き、主体として自分自身を構成することを研究した、とフーコーはいう。この第三の研究は、《欲望する人間の歴史》とよべるものを、「準拠のドメイン」「研究調査のシャン *champ*」にしたとのべている。

この準拠のドメインとは、「欲望する人間」と「歴史」という概念の領域であろう。これはまさに《プラチックな概念》である。フーコーは、「セクシュアリティの歴史」を描きだす困難についてこの序文で滔々と語っている。性的な行動やプラチックの、継続する形式、進化、普及の歴史をただ描くのではない。その行動を表象するとき手がかりにされた科学的・宗教的、哲学的な考えを分析するものでもない。そうではなくて、諸個人が自らを《セクシュアリティ》の主体と再認せねばならぬような《経験》が、近代西欧社会においていかに構成されてきたのかを検討せねばならない。それには、文化における①知識のドメイン、②規範性のタイプ ③主体性の形式の共関関係をとらえねばならぬ。

このようにセクシュアリティを語るということは、セクシュアリティを不変なもの *invariant* としたり、歴史的に単一的な形式をとるのはセクシュアリティが抑圧のメカニズムに影響されているからだとしてしたりする、思考の図式から脱けださねばならない。この古い思考は、欲望や欲望の主体を歴史領野の外におき、禁忌という一般形式においてセクシュアリティにおける歴史的なものを扱うだけだ。つまり、「欲望の概念」や「欲望する主体の概念」は、《欲望する人間 *homme de désir*》の概念からぬけでていない。ここを準拠にして、《系譜学 *généalogie*》にとりかからなければいけない。欲望とか色欲とかリビドーといった継続的な概念の歴史を描くことではない。そうではなく、諸個人が自分自身に注目し、自分を解読し、自分を再認し、自分を欲望する主体であると獲得したプラチックを分析することだ。自分の存在の真実を欲望のなかに発見させてくれるある種の関係が、諸個人の間で相互にいとまれるプラチックの分析である。こうした「欲望の解釈学」を、いかにして諸個人は自分自身にたいしてまた他者にたいしてつくりあげたかを研究すること。これが《デプラスマン》である。

もうひとつの準拠が《歴史》である。フーコーは自らの研究は《歴史》に準拠した研究であるが、《歴史家》の仕事ではない。自分の言葉を訂正し、自らを言い改めつづける必要があったエクササイズの儀礼集 *protocole* であった。しかも、哲学的なエクササイズであった。固有の歴史を思索する仕事のその思索のあり方を考えるものであった、と。自らは何であり、何をなすかを、自らが生きる世界を、問題設定する人間的存在における諸条件を定義する、

「思想の歴史 *histoire de la pensée*」であって、行動や表象の歴史ではない。

フーコーは、歴史の研究において「問題設定」をする。どのように、いかなる形式において性的活動 *activité sexuelle* が道徳的領域として構成されたのか？ この倫理的配慮はその形式と強度において変化があるにしても、なぜかくも執拗であるのか？ こうした問題設定は「プラチックの総体」と連続していて、それをフーコーは「存在の技法 *arts de l'existence*」とよび、「自己の技術 *techniques de soi*」として、その長期にわたる歴史を描きだそうとした。

ここでフーコーは、「問題設定」と「プラチック」の二つを交叉させ、「自己のプラチックからつくられる倫理的問題設定の歴史」を描こうとしている。「欲望する人間」を分析するには、「問題設定の考古学」と「自己のプラチックの系譜学」とを交叉させることだと主張する。具体的に四つの領域があげられている。

①規範化 *normalisation*：社会的・医療的プラチックからなされる「狂気と病気」の問題設定（『狂気の歴史』『臨床医学の誕生』）

②エピステミック *épistémique*：エピステミックな規則に従うディスクール的プラチックにおける「生命、言語、労働」の問題設定（『言葉と物』）

③ディシプリン *disciplinaire*：ディシプリンのモデルに従う処罰的プラチックにもとづいた「犯罪、犯罪行動」の問題設定（『監視することと処罰すること』）

これらはすでに著作として公刊されたものである。こうしてフーコーは自ら証したいセクシュアリテの歴史に関して、

④古代において、性的活動・性的快楽が、「生存の美学」の基準を働かせながら、自己のプラチックをつうじて問題設定されたかを考証するものとした。歴史の時期としては、古典期古代にはじまり最初のキリスト教時代までに焦点がおかれる。そして「プラチックな」テクストが資料として使用される。

これが、フーコーの「デプラスマン」である。問題は、「社会的プラチック」と「ディスクール的プラチック」をめぐって複雑に、しかし、明解な理論として展開されているのだが、ここでは問わない。ただ、フーコーは、「デプラスマン」することによって、たんにプラチックな概念——『セクシュアリテの歴史』では「欲望する人間」「歴史」であるが——をもって、自らの研究領域へ境界線を越えて入っていったのではなく、「プラチックの総体」がいかなるものであるのかをひきだしてきた。それを、問題設定し、問題設定の諸形式を分析しただけでなく（考古学）、プラチックとプラチックの変容をもとにした編成を分析した（系譜学）のである。

したがって、フーコーのデプラスマンはアルチュセールのように、認識論や科学的分析の土地へ行くことではない。理論的デプラスマンによって、学問／エピステーメがいかなるディスクール秩序を編成しているのか、その歴史を空間的に描きあげることである。そこから、そのディスクール空間における「不連続 *discontinuité*」を探しあててののだ。この理論的デプラスマンは「プラチックの総体」がいかなるものであるのかを、社会的プラチック——医療的・処罰的 *etc.*——とディスクール的プラチックの相互関係で描きだしたのである。

アルチュセールは『リール・ル・カピタル』において、歴史的時間の概念を素描することにあって、ミシェル・フーコーの仕事を次のように評価している。『狂気』の歴史とか医学にお

ける「臨床的まなざし」の歴史とかいうような、文化形成の歴史を把握することは、対象そのものを認知し構築し、その「対象の歴史の概念」を構築するものであって、それは、抽象化する仕事ではなく、抽象のなかにおける厩大な仕事であると、その歴史の描きかたからは、直接的な時間ではなく不連続の時間が不可避的にうかびあがってくる。全体の構造のなかにおいて、それぞれの対象の種差的性質や種差的な分節／結合が描かれる。こうした、アルチュセールのフーコー評価は、プラチックや普遍概念や思索者を主体とするような、その変化の歴史ではなく、「対象としての概念」の歴史の問題を指摘しているものであり、認識の対象と実在の対象とを混同してはなしえないものだとしている。だが、アルチュセール自身、1969年1月19日付の、『リール・ル・カピタル』の英訳者ベン・ブリュースターに宛てた手紙で、「切断」「問題設定的」といった用語を、自分がカンギレームやフーコーに、またバシュアールに負っているというが、それらと自らの概念とは違うのだと主唱しつつ、「フーコーは自分の生徒であり、彼はわたしの著作から〈なんらかのもの〉を自らのものにとりこむ、わたしの形づくったものを使用している。だが、彼はそのパーソナリティからして独自の哲学者であり、彼のペンのもとでわたしの意味とは別のものに変容されている」と述べている⁴⁾。

アルチュセールは《理論的デブラスマン》とはいわずに、ただ《デブラスマン》ないし《概念的デブラスマン》であり、《理論的なプラチック》という用語を使う。フーコーは、《理論的デブラスマン》とする。この違いの意味が、同じ〈場〉から客観化され、理論化される際の、理論の対象の違いから生じてくるのだが、ここではともかく《デブラスマン》なる域が共有されて理論的考察のベーシックなものであることを確認しておけばよいだろう。

註

- 1) “Entretien : Michel Foucault, <les mots et les choses>” et “Deuxième entretien avec Michel Foucault sur les façons d’écrire l’histoire” in Les Lettres françaises, 31 mars 1966 et 15 juin 1967. (ミシェル・フーコー、インタビュー「歴史の書き方——『言葉と物』をめぐって」『actes 3』1987年)
- 2) Michel Foucault, L’usage des plaisirs, (Ggllimard, 1984) の「序文」における“1 modifications”の稿から引用、読解する。
- 3) この点に関しては拙書『ディスクールの政治学』（新曜社、1987年）で論述。
- 4) Louis Althusser & Etienne Balibar, Reading Capital, (Verso, 1979), translated by Ben Brewster. pp. 323-4.

3 種別的なプラチックとイデオロギー

いささか複雑になったが、フーコーは《理論的デブラスマン》に実に執拗にアプローチした哲学者である。しかも、その哲学的な方法の基礎は確実にアルチュセールにある。そして、アルチュセールがマルクスの認識論的切断にこだわったのにたいしてフーコーは、マルクスの経済学的分析はリカードによって組み立てられた認識論的空間をまぬがれていないと、そのディスクールのプラチックの場におさめたうえで、マルクスの社会理論は完全に新しい認識論上の領野を開拓してはいるという。〈人間〉が〈社会〉へデブラスマンされることが提

起されたことは1節でのべたとおりであるが、ここでは、フォイエルバッハとマルクスの差異がいかなるコンテクストでもってアルチュセールによって論じられているかみておきたい。

ここでとりあげる論稿は、1963年10月の日付をもつ「マルクス主義とヒューマニズム」である¹⁾。

ヒューマニズムの概念²⁾は、存在する現実の総体を指示してはいても、科学的な概念でないため現実を認識する方法を与えない「イデオロギー的概念」であるにすぎないとするアルチュセールは、ヒューマニストとして活躍した二つの時期のマルクスを示す。第一段階は、ヘーゲルよりもカントとフィヒテに近い合理主義的、自由主義的なヒューマニズム。第二段階は、フォイエルバッハの「共同体的 *communautaire*」ヒューマニズムである。マルクスの「人間の哲学」を詳細に示した後で、1845年以降、人間の本質を基礎にするいっさいの歴史・政治理論と根本的にたもとをわかちマルクスが論じられる³⁾。

ここでもわたしたちは、ヒューマニズムの社会主義上の意味やマルクスの認識論上の切断が問題なのではなく、アルチュセールによる理論的なデプラスマンのとらえ方の手続きが問題であるのだ。

あらゆる人間学 (= 人類学) *anthropologie* あるいは哲学的ヒューマニズムとの断絶 *rupture* とは、マルクスが過去の哲学の問題設定を拒否し、新しい問題設定を採用したという、問題設定の切りかえである。過去の観念論的哲学は、認識論、歴史の概念、経済学、道徳、美学 *etc.* において、「人間性 *nature humaine*」あるいは「人間の本質 *l'essence de l'homme*」の問題設定に基礎をおいていた。理論的基礎としての人間の本質を拒絶して、マルクスは古い公準からなる有機的体系のすべてを拒絶する。それには、三つの理論的課題を遂行せねばならない。

- (1) 根本的に新しい諸概念を基礎にした歴史—政治理論を形成すること。
- (2) あらゆる哲学的ヒューマニズムの理論的意向を根元的に批判すること
- (3) ヒューマニズムをイデオロギーとして定義すること

これをより一般的な課題としていいかえれば、《デプラスマン》を行使するには、(1)はそのものとして

- (2) 準拠する概念の理論的志向を根元から批判し
- (3) 準拠する概念をイデオロギーとして定義すること

といえよう。この難しさは、たんに社会の歴史の新しい理論をつくりだすということのみでなく、「無限の含蓄をもつ新しい〈哲学〉」(アルチュセール)をも提出せねばならないところにある。マルクスは、観念論のみならずマルクス以前の唯物論の基礎にあった古い公準(主体の経験論、観念論、本質の経験論—観念論)を、実践 *praxis* の弁証法的一歴史的な唯物論に変えた、とアルチュセールはいう。

さて、「実践の弁証法的・史的唯物論」を、アルチュセールは次のようにいにかえる。《人間のプラチック *la pratique humaine*》の種別的に異なる水準の理論、つまり、「経済的プラチック」「政治的プラチック」「イデオロギー的プラチック」「科学的プラチック」という種別的な水準を識別した理論であり、人間社会の統一の種別的節合 *les articulations spécifiques* に基づいた固有の節合における《人間のプラチック》である。ひとことではいうと、フォイエルバッハのいう《プラチック》は、イデオロギー的で普遍的な概念であったが、マ

ルクスは種別的に異なる多様な具体的概念をもちいて、社会構造の種別的差異に、それぞれ固有のプラチックを設定したのである⁴⁾。

アルチュセールは《praxis》も《pratique》もイタリック体で強調しつつ、《praxis》を諸々の《種別的なプラチック》といいかえている。アルチュセールが「実践=praxis」論者ではなく《プラチック》論者であることは、字句でなくその論理をテキストのままに置いていけば自ずとわかびあがってくることだが、あえて「目的意識的な」実践概念を構成しようとはしていない。むしろ、慣習的にいとなまれている人びとの日常的な行為、その「イデオロギー的」で「プラチック」な秩序や概念の使い方を、認識の対象にすえようとしていた。アルチュセールにとって、「イデオロギー的」という形容詞と、「プラチック」という形容詞は等価で叙述されている。

このことは何を意味するかというと、あるイデオロギーが認識されればそのイデオロギーが消えさってしまうということにはならない、つまり、イデオロギーを認識することは、ある所与の社会における「可能性の諸条件」「その構造」「その種別的な論理」「プラチックな役割」を認識するということであり、その必要性の諸条件を認識するということであるからだ。たとえば、貨幣のイデオロギーが認識され、その性質が把握されたからといって、貨幣の外観、その存在形式、ひとつの物が破壊されるというのではなく、外観というものが存在そのものであり、存在する生産様式とおなじく必然的であるその構成が認識されるのである。これが、プラチックな次元、理論的デプラスマンによって切りひらかれるプラチックな場での出来事である。

アルチュセールにとって、プラチックな概念=イデオロギー的な概念とは、《デプラスマン》の境界線に立っているもので、理論的に新しい地盤に移すしまたこちら側へ戻ってしまうものである。したがって、このプラチック的=イデオロギー的秩序を正確につかむようにしなければならない。そして、いかなる「ことば」も、このデプラスマンにおいてプラチックな機能をはたすと、同時に、そのうえで理論の領野から消えうせていかねばならない、と主張する。

ここで、イデオロギーとはいかなるものであるとアルチュセールは考えているのか、それを論じる場を確認しておく必要がある。あるいは、イデオロギーの機能の仕方とはいかなるものであるのかの確認である。

アルチュセールはイデオロギーを、表象 *représentations* の一体系であり、理論的機能よりも実際的一社会的機能 *fonction pratico-sociale* が優越しているものとする。表象とは、イメージ、神話、観念 *idées*、概念等であり、歴史的な存在・役割を所与の社会において与えられているものである。そして、表象とは《意識 *conscience*》と関係ないもので、「構造」として大多数の人びとにおしつけられて、その《意識》を通過していないものである。つまり、文化的な対象として知覚され受けいれられ忍従されるもので、《無意識的》に、人びとに気づかれない過程によって人びとのうえに機能的に働きかけている。人間は、意識の形態としてでなく、自らの《世界》の対象として、自らの《世界》そのものであるとして、自らのイデオロギーに《生きている》のである。

つまり、結論的にアルチュセールが主張したい論点は、イデオロギーは大衆の表象体系として、どんな社会においてであれ——階級のある社会であれ階級のない社会であれ——必要

不可欠なもの *indispensable* であるというのだ。「人間を形成し、変容し、自らの存在諸条件の要求にこたえられる状態に人間を置いておくために」イデオロギーは必要である、とするアルチュセールは、史的唯物論は共産社会がイデオロギーを通りすぎてしまうなどという考えをもつことはありえないとする。新しい生産様式に対応するイデオロギー形態が必ずとられるというのだ。

したがって、イデオロギーとは、《歴史》の不測な錯誤でもこぶでもなく、社会の史的命に本質的な構造である。イデオロギーの必要性というものが存在しており、再認されているがゆえに、イデオロギーに働きかけて、それを《歴史》にうつしだされる道具として変容することができる。つまり、人間はイデオロギーにおいて、イデオロギーをとおして、イデオロギーによって、自らの行為を生きている。人間と世界との歴史を含めての《実際に生きられた》関係は、イデオロギーによって通過されるし、また、イデオロギー自体であるという意味なのだ。

人間が世界に関わって生きる関係とは、現実の関係であると同時に、実際に生きられた《想像的 *imaginaire*》な関係である。そこで、イデオロギーとは、「人間の、世界にたいする関係、つまり、自らの現実的存在条件にたいする現実的關係と想像的關係との重層的に決定された *surdéterminée* 統一である」とされる。

これは、たとえば《自由》というイデオロギーを考えたとしよう。ブルジョア階級は、その存在条件との関係において資本主義的な自由経済の権利として自由であるという現実的關係にあるとともに、労働者をもふくめてすべての人間は自由であるという想像的關係に包みこまれており、それがまたほかならぬ、自由を守り、自らを守る現実的關係の表明でもあるのだ。したがって、自由は幻想であり錯覚であると批判、攻撃したところで、自由のイデオロギーは消えさるものではない。イデオロギーとは虚偽意識でも錯覚でもなく、プラチックに実際に生きられているものである。

1970年の「イデオロギーとイデオロギー的国家装置」の「探究ノート」⁵⁾においてアルチュセールは、

- 1) イデオロギーは歴史をもたない。
- 2) イデオロギーは、諸個人の、存在の現実的諸条件にたいする自らの、想像的關係の、《表象》である。
- 3) イデオロギーは諸個人に主体において呼びかける。

と、さらにイデオロギー論を詳細に論述していくが、ここでは、イデオロギーの働く場が境界線のこちら側であろうとむこう側であろうと存在していて、それがまさにプラチックであること、そして、こちら側のイデオロギーがいかなるイデオロギーとして実際に機能しているか、そのイデオロギーそのものを手がかりにしてこそ、デプラスマンによる認識への道が切りひらけるという論述である。イデオロギーによる、イデオロギーのもとのプラチック以外に、プラチックは存在しない⁶⁾。

日常生活の「イデオロギー的再認の物質的・儀礼的プラチック *pratique rituelle matérielle de la reconnaissance idéologique*」として、アルチュセールは、訪れた友人が閉じたドアごとにノックをしてドアをあけるとか、道で知人にあったとき挨拶をして握手をするとかいったプラチックと、そこでの《再認》の儀礼を例にあげて、イデオロギーについて論

じている。つねに、慣習的な日常的行動を問題としており、たとえ、レーニンや毛沢東についてふれたにせよ、その普遍的な形式の次元でもっていいかえを行使している。主体は、イデオロギーのプラチックの場でのみ儀礼しているのだ。「イデオロギーとイデオロギー的国家装置」は、種別的な社会プラチックとそれに対応する社会制度とを再生産の視角から論じた《プラチック》論であって《実践(プラクシス)》論ではないのだが、それは、『プール・マルクス』からしてそうなのだ。《プラチック》を、フォイエルバッハのように類的にとらえるのではなく、種別化してとらえること、《人間のプラチック》を、社会的に異なる多様なプラチックにおいてデプラスマンすることを、アルチュセールは提示した。

ここまできて、わたしは《プラチック》とフランス語読みにしてきた「ことば」に、まず《慣習行動》ないし《実際行為》という日本語の意味をあて、そしてこの訳語を消しさらねばならない任を負わせたい。つまり、《デプラスマン》とは、たんに概念を、ある概念から別の概念へつくりかえればよいという実践的なものではなく、実際の慣習行動の、具体的で現実的な場へ移り、その場におけるプラチックを対象にしうる《プラチックな概念》をとらえ、その《プラチックな概念》を客観化し、そして、消しさるといふ行為を完成させねばならないのだ。

そもそも、わたしがフランス語をそのままの読みで《プラチック》として使用している概念は、理論的概念でも認識の用語でもなく、現在の社会科学的思考がとらわれている《実践＝プラクシス》のイデオロギーにたいして、その実践/主体の問題設定を《デプラスマン》するために、フランス語‘pratique’とドイツ語‘Praxis’との間に生じている《ずれ》を徴候的に読みとり⁸⁾、新たな問題設定をつくりだすべく使用している。まさに《プラチックな概念》なのである。

〔註〕

- 1) ‘Marxisme et Humanisme’ in Cahiers de l’Institut de Science Economique Appliquée 20, June 1964, pp.109-33. (P. M. pp.225-249).
- 2) 「ヒューマニズム」は、イデオロギー的な問題設定によるもので、フォイエルバッハの人類学(人間学)および初期マルクスをとらえていたものであるが、後期マルクスは理論的な「反ヒューマニズム」を提示した、とアルチュセールは論じる。イデオロギー的な問題設定として、「経験論」「観念論」「歴史主義」をアルチュセールは考えている。
- 3) アルチュセールによるマルクスの仕事の区分は、初期の仕事(1844年まで)、切断の仕事(1844年)、移行期の仕事(1845-57年)、成熟した仕事(1857-83年)であるが、これはバンクチュアルな切断ではなく「継続する切断」としてとらえられている。
- 4) P. M., p. 235. 唯一この箇処に‘praxis’が使用される。「プラクシスの史的・弁証法的唯物論」というのは、マルクスの唯物論を直接に示したものともいえるが、なぜあえてそれを《プラチックの種別性》としかえるのか。十月革命の時期のあたりに起源をもつマルクス主義の解釈が世界的に広がるが、その考えは、ルカーチ、コルジュ、グラムシ、デラ・ヴォルベ、コレッティ、サルトルといった人物である。これらは、‘coup d’essence’(本質の行い/本質的な部分)をもって、時間を連続的・直接的に考える。歴史の認識はそれぞれの時代の自己意識であるとする。ルカーチは、革命的プロレタリアートの階級意識、グラムシは支配するヘゲモニー階級の有機的なイデオロギー、サルトルは全

体としての人間的な相互主観性のプラチックである《個人的実践 praxis》とする。こうした、マルクス主義者は、《実践 praxis》の論理であって、アルチュセールは、そうしたマルクス主義と区別される《種差的プラチック》の理論をマルクス自身にみた、と考えられるのではないだろうか。サルトルのように《praxis》を執拗に定義づけることをしていないのだ。

- 5) 'Idéologie et Appareils Idéologiques d'Etat (Notes pour une recherche)', La Pensée, juin 1970. pp.3-38. この稿は、Louis Althusser, Positions (1964-1975), (Editions Sociales, 1976) に所収。
- 6) Ibid. p.112.
- 7) 例えば, P.M. pp.177-185, p.186.
- 8) 「問題設定」とは世界観ではなく、諸個人の思考の本質でも、体験的な生成的読み方によってテキスト体から導きだされうるエポックでもない。プロブレマティックのなかでは、問題も概念も不在であるが、そこに語られていて語られていないものが読みとれる。それはフロイトが患者の発語のなかから読みとったように、徴候的な読み (lecture symptomale) によってのみつかみだされるものである。アルチュセールはマルクスによる古典の《読み》を、《徴候的な読み》としてとらえヘーゲル的な読みから区別した。

4 《理論的プラチック》の理論

これまでとりあげてきたアルチュセールの論稿は、ヒューマニズムというイデオロギーに関するものであったが、ここでは1963年4-5月の日付をもつ「唯物弁証法について Sur la dialectique matérialiste」という哲学論稿⁷⁾をとりあげ、そこで語られている《理論的プラチック》とはいかなることをいうのか、それに焦点をあて明らかにしておくことにしよう。ここでも、アルチュセールのマルクス主義的な課題と論旨はおいておいて、根本的な哲学上社会科学上の問題に焦点をおく。

アルチュセールは二つの「理論的問題 problème théorique」をあげる。マルクスがヘーゲル弁証法に認めている《合理性》とは何かという点と、マルクス弁証法をヘーゲル弁証法と区別する《種別性 la spécificité》とは何を構成しているのかという点で、これはつまるところマルクスによるヘーゲル弁証法の《逆転 (顛例) renversement》は何において構成されているか、その種別的差異とは何であるかという「理論的問題」である。「なぜ理論なのか？」というその意味を明示するところに、理論と実践 praxis ではなく、理論的問題解決のうちにある理論的プラチックが、プラチックな解決/プラチックな問題との対応において、《プラチック》の場として切りひらかれている。空想にもとづく難問でなく、問題という形式をもって、強制的諸条件に服従した形式で提起された現実的に存在する困難さを意味する。問題が「提起(設定) pose (situe)」される認識(理論)の領野⁸⁾、その提起・位置 position の正確な《場 lieu》、それを提起するために求められる諸概念、これらの定義が問題の形式である。マルクス主義——に限らないのであるが——のプラチックのうち、ということはマルクス主義が実際に行なってきた/行なっていることのうち、《プラチックの状態 l'état pratique》で存在しているところに、理論的解釈があるということは、理論的問題の提起と解決は、プラチックな状態で存在している《解決》を理論的に表明する énoncer ことであるというのだ。つまるところ、プラチックなものを「理論的に」エノンセルし、この「理論的

《エノンセ》*énoncé théorique*」が、プラチックな解決にたいする種別的《概念》をつくりあげること（認識をみがきあげること）と、イデオロギー的な幻想や混乱を根元的な批判によって現実的に破壊しうることを、「現実的な理論の仕事」として要求するのだ。

アルチュセールは、なぜこんなにも理論的なことについて配慮せねばならないかという、ずっと以前から「指摘され *signalée*」「再認され *reconnue*」ているが「認識され *connue*」ていないことがあるからだ、つまり、存在のプラチックな再認 *reconnaissance* は、「認識 *connaissance*」ではないと、この両者を識別している。これは、「再認」や「認識」を、プラチックの領野、つまり、イデオロギーの領野と、理論の問題との関係で設定しているのだ。アルチュセールのいう《プラチック》は、次のように定義され、既存のマルクス主義とは微妙に、しかし、根元的に（理論的根本にいたるまで）異なったものとなっている。

アルチュセールは、《プラチック》を《変容の過程 *processus de transformation*》で考える。決定されて与えられた原料を、決定された生産物において、決定された生産の諸手段を用いて、決定された人間的ワークによって実際に変容し、うみだすことだ。この過程の《決定的なもの》は、原料や生産物といった、つまり触知しうる物の方にあるのではなく、プラチックそのもの、つまり《変容のワーク *travail de transformation*》²⁾ それ自体の方にある。工場で実際に労働生産物を生産するというように決定づけてしまうのではなく、そうした工場労働も種別的なもののひとつとし、理論的なプラチックをも《変容のワーク》であると含むプラチックをさしている。人間、手段、手段を有用化する技術的方法が、種別的な構造においてもちられる。複合的におなじひとつの総体に有機的に所属しながらも、現実的に区別される、異なるプラチックが存在しているのだ。「《社会的プラチック *pratique sociale*》は、決定された社会において存在する諸々のプラチックの複合的統一体であるが、多数の区別されるプラチックを含んでいる。」この《社会的プラチック》の複合的統一体は、構造化されている。そこでの「最終審的に決定的なプラチック *pratique déterminant en dernier ressort* とは、存在する人間の活動によって、所与の自然（素材）を、活用できる生産物へ変容するプラチックであり、（この人間は）決定された生産諸関係の枠内で、決定された《生産諸手段の系統だった規制》^{レグレ}をもちいることによって労働するのだ。」

こうした、「生産」という社会的プラチックのほかに、「政治的」プラチック、「イデオロギー的」プラチック、「理論的」プラチックといった社会的プラチックをアルチュセールはあげ、《社会的プラチック》にたいする理論の関係とはなんであるのかを考えねばならぬと主張する³⁾。

そこから、「理論」とはプラチックの種別の形式であり、「理論的プラチック」はプラチックの一般的定義に含まれ、「経験的」であれ「イデオロギー的」であれ「技術的」であれ、そうしたプラチックによって与えられる素材——表象・概念・事実——に働きかけるものとされる。そのうえで、彼は、《科学的》な理論的プラチックと、《イデオロギー的》な理論的プラチックとを明白に区別し、そこに「質的な」不連続 *discontinuité* 《qualitative》の形式があることをみななければならぬとする。バシュラールとともにそれを、「認識論上の切断 *coupe épistémologique*」とよびたいとして、この「切断」があらわれるときに弁証法が働いているのだと考える。

このような考えは、理論がプラチックにもちこまれるという関係を示しながら、さらに、

プラチックへの理論の関係が、省察され発表されるという条件におかれるゆえに、その関係自体も理論の対象となり客観化されることが暗示されているのだ。表面的にみるとアルチュセールは、イデオロギーの領域と科学の領域を区別して、科学の領域のみで理論を考えるべきだと主唱しているように読みとられがちであるが、そうではなく、イデオロギーの領域から科学の領域への「デプラスマン」を、ただ移ればよいというのではなく、移ることのプラチックとして、そこに「理論」の問題を定めているのだ。すでにできあいの概念を外部からプラチックに適用するのは理論的プラチックではない。その外部の真理をも変容するものが理論的プラチックである。理論とは、科学的性格をもつ理論的体系だけであるのではなく、プラチックに関わることによって既存のイデオロギー的なものに変容をもたらす、理論的プラチックという「変容のワーク」である。だが、「実践」ではない。

アルチュセールは「理論的プラチックの過程」として、三つの一般性 *généralité* を区別し、相互の関係を理論的ないとなみとして明示する。ファンクショナルにその関係を簡略化しておこう。

「一般性Ⅰ」：科学の仕事が働きかける理論上の原料・素材で、予備的なものである。

「一般性Ⅲ」：科学の理論的プラチックによって上の素材が特殊化された概念、つまり認識というもう一つ別の具体的な一般性となる、科学の仕事の結果である。

この「一般性Ⅰ」を「一般性Ⅲ」に変容することによって、科学は働き生産することになる。このとき、生産諸手段に対応する、契機、水準、審級がある。それが、「一般性Ⅱ」の位置になる。

「一般性Ⅱ」：一群の概念によって構成されているが、その概念は矛盾しつつ統一体をもっており、科学の「理論」を考慮しうるものへと歴史的モメントにおいて構成する。科学のあらゆる「問題」が必然的に提起される領野 *champ* がどこであるかを定義する「理論」である。

図式的な標識 *indications schématiques* であるが、とことわったうえで、理論的プラチックとは、「一般性Ⅰ」にたいする「一般性Ⅱ」のワークによる「一般性Ⅲ」の産出である、と示される。

この三つの一般性を識別することによってアルチュセールは「理論的プラチック」の「変容のワーク過程」を示すとともに、「具体的なもの」と「抽象的なもの」とをめぐるフォイエルバッハの混乱、およびヘーゲル弁証法の逆転の意味とはいかなるものであるかを示そうとしている。

まず第一に、「一般性Ⅰ」と「一般性Ⅲ」とのあいだに本質的な同一性がまったくなく、現実的な変容がつかねにあるという提起がなされている。

第二に、「一般性Ⅰ」から「一般性Ⅲ」へと通過させるワークは、理論的プラチックの過程でしかなされないこと、まったく「認識のなかで」なされることである。

抽象的なものが理論であって、具体的なものが現実的なものだという考えに入ってはならない。「思考という具体的なもの *le concret-de-pensée*」と「現実性という具体的なもの *le concret-réalité*」と、二つの具体的なものを区別せねばならない。前者は「認識」であ

り、後者は「認識の対象」である。《現実的一具体》は、「思考の外部に独立してその前後に実在している」（マルクス）のであって、《認識一具体》と混同してはならないし、《認識一具体的なもの》をうみだす過程は、理論的プラチックのなかですべてなされる。「思考の具体的なもの」が《一般性Ⅲ》であるのだが、それは、その対象である《現実的一具体的なもの》にたいする認識であるとしたとき、混乱が生じてくる。

イデオロギーの側では、《一般性Ⅲ》は、認識、理論、思考、科学が一括される「抽象的なもの」の領域内に入れられてしまう。そして、具体一現実「問題」——つまり認識の問題——として考えられるため、科学的プラチックによって、生産されたものが問題設定として考えられてしまい、現実的問題にたいする非問題設定的解決が、そこで考えられてしまうのだ。つまり、対象とその認識との間の関係が、「非一問題設定」されてしまっている。この条りがややこしいのも、いかにわたしたちがイデオロギー的にしか思考していないかのプラチックがあるためなのだが、抽象的なものとは、第一の《一般性Ⅰ》なのであって、それを《現実的なもの／具体的なもの》としてしまってはならない、イデオロギーの土地にあるプラチックな領域を《抽象的なもの》と考える必要があるということであるのだ⁴⁾。そして、抽象と具体とを直接に関係づけてしまうとき、問題設定がなされずに、つまり、《一般性Ⅱ》がたてられずに、現実がただ問題として作りだされてしまう。このように読解してよいだろう。フォイエールパッハや初期マルクスは、理論・科学に属する抽象化を現実それ自体である具体的なものに対応させて、批判を展開した。それが、イデオロギーに属する批判でしかないのは、科学的プラチックがなす現実性、その抽象化の有効性を否定してしまい、認識という理論的な《具体的なもの》がもっている現実性を否定してしまう。自ら、具体的であることを願っているのに、認識が生産するプラチックの現実性を否定してしまうからだ。

アルチュセールはふれてはいないが、(日本語で)《実践》という用語をたてて《プラチックの領域》をみない思考は、この混乱につねにおちいってしまっている。日本でのアルチュセールにたいする理解が、《プラチック》の場とそこでの理論的プラチックにある点を見失い、外から提示された概念であるかのように「多元的決定」や「最終審的決定」や「理論的实践」を使用しているあり方がそうだ。

次に、アルチュセールは、ヘーゲルの混乱を指摘する。第一に、ヘーゲルは、科学的認識の生産という仕事を、「具体的なもの(現実的なもの)それ自体の生成の過程」とみなしている。その原因は、第二に、認識過程の初めに姿を見せる普遍的概念を、この過程の本質および動因とみなしたり、それ自身をうみだす概念とみなしてしまう。つまり、理論的プラチックによって《一般性Ⅲ》に変容されるはずの《一般性Ⅰ》を、変容の過程自体の本質および動因としてしまうのだ。

端緒における抽象的な《一般性Ⅰ》は、働きかけられる一般性で、働きかける《一般性Ⅱ》と同一でなく、働きかけによってうみだされた種別化された《一般性Ⅲ》——つまり「認識=《具体的—理論的なもの》」——ではない。

《一般性Ⅱ》は、《一般性Ⅰ》の即自から対自への通過という単純な発展ではまったくない。《一般性Ⅱ》は、考慮にいれられている科学の《理論》であり、ある過程全体の結果である。タームの強い意味での現実的変容過程であり、単純な発展の形式でなく、現実的な質的不連続をひきおこす変様 mutations と再構造化 restructurations の形式である。した

がって、《一般性Ⅱ》が《一般性Ⅰ》に働きかけるとき、科学の創設においても、それ以後の歴史においても、自分自身には働きかけない。そして、《一般性Ⅰ》の方は、このワークからつねに、現実的な変容をうけており、なお《一般性Ⅰ》に、一般性という一般的形式が残るにしても、その形式からわたしたちが学ぶものは何もない。

アルチュセールは、他の稿でこの《一般性Ⅰ》に古典派経済学を、《一般性Ⅱ》にヘーゲル弁証法を、《一般性Ⅲ》に資本論の体系／科学等を設定している。つまり、ヘーゲル弁証法それ自体に顛倒がなされたのではなく、それが、プラチックの場で、境界線を越えていくべく、古典派経済学の経済学的な概念にたいして理論的プラチックとして働きかけられ、マルクスの理論体系が、「対象としての概念」として差出されたのだ。ヘーゲルにおいては、この三つの一般性のあいだに介入したり現われたりする質的不連続が考察されていない。たとえ考えられても、理念の運動とされてしまい、もう一つ別の現実、本質的でイデオロギー的な現象にされてしまう。そして、ヘーゲルは、抽象的なものから具体的なものへの過程の統一性を、概念の自己生成として、最初の即自なるものの、その結果の生成における疎外の諸形成自体を媒介とする単なる発展とみなす。このように、アルチュセールは、理論的プラチックにおいて働いている三つの一般性を構成する本質があるという一般性をイデオロギー的にたてているだけのヘーゲルを批判している。つまり、科学的プラチックが抽象的なものから出発して、認識という具体的なものをうみだすということを認めること。それはまた、理論的プラチックの素材にあたる《一般性Ⅰ》が、《一般性Ⅱ》とは質的に異なることを認めること。こうした、二つの一般性のタイプを区別し、《一般性Ⅰ》にたいする《一般性Ⅱ》の優越性、つまり「理論」の優越性を認めないのが、ヘーゲル観念論の基礎にあるのだ、と批判している。

したがって、「顛倒」という概念をひとつの《認識》とみなすことは、その概念を支持するイデオロギーにおちいつていることで、理論的プラチックの現実性を否定していることである。あるイデオロギーを顛倒して、ある科学を手にいれることはできない。ある科学を手にいれるには、イデオロギーが現実的なものとかかわりあっていると信じられるような領域を棄てること、つまり、イデオロギー的な問題設定をすてることである。イデオロギーの基本的な諸概念の有機的な前提、その体系、大部分の概念全体をすてることによって、別の要素のうちに《dans un autre élément》、新しい科学的な問題設定の領野のうちに、新しい理論の活動をうちたてることである。

これにつづいて、アルチュセールは、所与の構造化された複合的な総体がいかなるものであり、支配的な要素をもつ矛盾と重層的決定がいかなるものであるかと、哲学的概念と社会構造の概念との関係をつかんでいくのだが、わたしたちはそこで思考の分岐点にたたされるのだ。つまり、そこには、ここから先は「マルクス主義」の思考か、それとも「プラチックの論理」の思考か、「どちらへいくか」の標識がたっている。マルクスを基盤にして、二つに分岐する道を、E・バリバールやクリスチャン・ボードロ、ロジェ・エスタブレのように踏襲していくのか、それとも、フーコーやブルデューのような道を選んでいくのか、確実に社会科学の理論としては分岐していくものがある。

つまり、種別化されたプラチックの審級とその分節／接合を、諸構造の客観性のなかに、

その複合的な統一体のなかに探っていくのか、それとも、それぞれのプラチックを代行する諸個人の責任ある *responsible* な行為、客観的なレグレのなかでのレグラシオンする戦略や調整の諸関係としてとらえていくのか、1970年代のフランスにおける社会科学的な考察は、はっきりと異なる成果をわたしたちの前に出現させた⁵⁾。その成果を知るわたしたちは、この《理論的プラチック》の考察の次元で、アルチュセールにたいしてはとどまりたいのだ。

補足的に、しかし、見落すことのできない問題点であるのだが、《デプラスマン》とは、いうまでもなくフロイトの用語であり、精神分析学では「置き換え」「置換」と邦訳されている‘*Verschiebung*’の仏訳である。アルチュセールはフロイトの用語と論理思考とを、社会構成体の論理にくみこんで決定的ともいえる思考を開示する。‘*surdétermination/Überdeterminierung*’が、その典型であるが、フロイトが夢の思考を二つのあり方で示した、数多くの夢一思考が一つのイメージに「圧縮 *condensation*」されることによるものと、ある特別な潜在的思考のイメージかあいまいなイメージに身体的なエネルギーによって転移される「置換」によるものとの、夢の思考の表象を、アルチュセールは、マルクス主義の歴史理論における矛盾の重層的決定の異なる諸形成を示す、物理的な重層的決定の過程として考えた。全体としての社会構成体において社会構成体を構成する各々のプラチックに、矛盾の諸効果があらわれる。支配と服従のパターンを定義するうえで、各プラチックや各矛盾につきもどされる、そうした構造的な関係を描きだした。

このアナロジーは、しかし、一方でマルクスの経済学的な社会理論の形成が、他方にはヘーゲルの弁証法が、フロイトの論理において交叉するため、いろいろと問題のある考察となっている。わたしたちが、たちどまりたいというのは、こうした複合的な社会構成体を対象とする考察がすでに、マルクス主義の枠組のなかで構成されている問題域であるからだ。精神分析理論それ自体においてさえ、《デプラスマン》という「科学的心理学草稿」以来の難しい概念を、とても社会構成体の読解のなかにはひきこめないと思う。しかし、《デプラスマン》という理論的プラチックの仕方としては学んでおいて無駄ではない。

ラランシュ／ボンタリスの『精神分析用語辞典』によれば、《デプラスマン》とは、「ある表象のアクセントや関心や強度が、その表象を離れ、別の表象へ移ることができるという事実をさす」とある⁶⁾。「備給のエネルギーは、表象を離れ、連想のいろいろな経路にしたがって移行してゆく」という備給のエネルギーの経済論的仮説に入ると、もう、社会学的な思考からは離れていく。ただ、《デプラスマン》が検閲の結果としてあらわれるといったような防衛の機能を示す場合や、また、R・ヤコブソンが、デプラスマンを隣接の関係が問題となる「換喩(メトニミー)」に結びつけ、J・ラカンは《デプラスマン》を「換喩」と同一視した、という点は、一考に値する問題である。ミシェル・ド・セルターは、いくつかのプラチックを切りとり、それを特別な領域として扱えるようにするフーコーやブルデューの、きりはなされて隔離された場合は、空間全体のメトニミーと考えられ、境界線をひかれているがゆえに観察可能なある一部分が、非限定的な全体を代表し描きうるようなものとなっているのだ、とのべている。アルチュセールとは異なる《デプラスマン》の仕方の可能性を、セルターは明示している⁷⁾。これらの課題については別の機会に論じたい。

さて主に、三つの論稿をとりあげて社会を考察する「理論」の場が、プラチックの領野にあることを指摘しつつ、その実際の理論的プラチックのあり様とその意味を確認してきたが、アルチュセールのこの三つの論稿は、本稿でとりあげてきた順とは逆の順で年代的には記述されているし、『プール・マルクス』においてもそのように編まれている。「唯物弁証法について」の論稿においては‘passer’の語は登場するが、≪デプラスマン≫の語群は登場していない。「現実的ヒューマニズムにかんする補足ノート」とそれとを比較したとき、‘renversement’（顛倒）ではだめで‘déplacement’でなければならぬという転回を読みとれる。しかし、≪デプラスマン≫をそのまま社会理論の「カテゴリーにあてはめていくと、『リアル・ル・カピタル』のアルチュセールの論稿のあとに、第Ⅲ部としておさめられているE・バリバルの論稿のごとく史的な「移行理論」に還元されてしまうのだ。そうではなく、第Ⅱ部の『『資本論』の対象』をめぐるアルチュセールの論稿を、わたしたちは読みすすめていくことで本稿の問題をさらに深めていくことができるし、また「イデオロギーとイデオロギー的国家装置」において≪プラチック／イデオロギー≫の理論を深めていくことができる。これは、次の機会に「アルチュセールを読むⅡ」として論述したい。

≪デプラスマン≫を、既存のマルクス主義的・社会科学的な概念にたいしてほどこすとき、それを≪一般性Ⅲ≫と見誤ってはなるまい。そうではなく、1950年代に蓄積されてきた日本の社会科学的な諸概念は、1960年代の高度成長の産業発展のプラチックな出来事のなかで、イデオロギーに属する問題設定であるにすぎなくなっている。これらの諸概念を≪一般性Ⅰ≫とすることで、それと異なる新しい問題設定を構成していかなければならない。

そのとき、≪一般性Ⅱ≫がいかなるものであるのかは、既存の社会科学的な諸概念がイデオロギーであることが明示されながら、橋渡ししうる≪プラチックな概念≫がいかなるものであるか探っていく必要がある。アルチュセールは、自らも反省しているが、この≪一般性Ⅱ≫を十分に明示しきれなかった。それは、彼の社会理論のなかに、極めて顕著にあらわれてくる。フーコーのように、対象そのものをきりかえるか、ブルデューのように、諸々の具体プラチックを種別的にとりあげながら、「権力」ではなく「象徴権力」、「資本」ではなく「象徴資本」「文化資本」「教育資本」「言語資本」といったように種別化するか、いくつかの理論的デプラスマンの仕方がある。たんに実証をつみあげ、その現実／具体を認識するといった経験科学でもって、社会科学は甦りえないのだ。

註

- 1) ‘Sur la Dialectique Matérialiste (De l’Inégalité des Origines)’, La Pensée 110, août, 1963, pp.5-46. (P.M. pp.161-224)
- 2) この‘travail’は、「労働 labourer」でも「仕事 œuvre」でもなく、英語でいう「ワーク」に近い。働き、行為といった、行為そのものを指す語と解される。つねに、≪プラチック≫な意味あいでも論じられている語といえよう。
- 3) 「経済的プラチック」は、人間の労働によって自然を社会的産物に変容すること、「政治的プラチック」は、革命によって社会的諸関係を変容すること、「イデオロギー的プラチック」は、イデオロギー闘争によって生活している世界での諸関係を新しい関係へ変容すること——というように、エン

ゲルスや毛沢東をもってするとそう解されがちであるが、アルチュセールはそうした《実践》の内容理解に比重があるのではなく、あくまで社会的プラチックを種別化して考えるという点にポイントがある。そして、第四の「理論的プラチック」を、最終審級的な決定におけるプラチックのあり方から参照して、原料・資材に生産手段をもって働きかけ、変容して生産物をつくり出すという《過程》の論理において抽出したのである。

- 4) 抽象と具体の対象は、あくまで理論の系列のなかにあるものであって、「抽象的なもの」は理論的プラチックの出発点（《一般性Ⅰ》）であって、「具体的なもの」はその到達点、《一般性Ⅲ》である。
- 5) Pierre Bourdieu, *Choses dites*, (Minuit, 1987).
また、1975年以降、「社会科学高等研究院」での社会学分野における多様な研究成果。
Charles Lemart, *French Sociology*, (Columbia University Press, 1981) 参照。
- 6) ラランシュ／ポンタリス『精神分析用語辞典』（みすず書房）、34-6頁。
- 7) Michel de Certeau, *Art de faire*, (Union Générale d'Éditions, 1980). 山田登世子訳『日常実践のポイエティック』（国文社）第五章、参照。

(1988. 9. 30)